

B-52 日本と東南アジアにおける洗剤と洗たく
安城学園大家政 寺田純子

目的 日本および東南アジア（インドネシア、シンガポール、マレーシア、香港）の衣服管理の実態を知る目的で、各地域における洗剤と洗たくの実状を比較調査した。

方法 1978年7月下旬より約1ヶ月にわたり、上記地域において、聞きとり、アンケートにより、家庭における洗たくの状況と洗剤に対する意見を調査した。

つぎに、各地の市販衣料用合成洗剤（液体洗剤を除く）19種類について、包装箱上の表記内容を分類し、洗剤の重臭がどこに置かれているかも検討した。また配合界面活性剤、ビルダーの分析を行ない、その組成を明らかにし、さらに洗剤水溶液のpH、起泡性、などを測定した。

結果 水道、洗たく機の普及率、人件費などにより、各地域の洗たくの実状は異なるが、すべての地域で、一日一回の洗たくを原則としており、家庭内の重要な仕事となっていた。

しかし、洗剤に対する認識は一般に低く、包装箱上の品質表示が見られたのは、日本のみであった。洗浄力の高いことの他に、地域によつては、低泡性または逆に高泡性を強調しており、それぞれの洗たく様式の特徴をよく表わしていた。使用量は日本の40~25g/30lに対して、ほぼ同量のものから、1回分90~125gと非常に多いものもみられた。

組成は日本以外では、ABSとトリポリリン酸ナトリウムを主体に、アルカリビルダーを加えた、比較的簡単なものが多く、一部に非イオン系の配合されたものが見られた。エチルアルコール可溶分として求めた界面活性剤配合量は、10~35%までの広い範囲にわたっていた。